

美しい日本の原風景を失わないためにできること

久留女木竜宮小僧の会 事務局 鈴木一記

「本番入ります！」監督の掛け声がこだますると、100人近いスタッフが一斉に静まり返り、役者の迫真の芝居が始まる。10月7日、2017年の大河ドラマ「おんな城主 直虎」の撮影が、久留女木の棚田で行われました。

久留女木の棚田は静岡県浜松市北区引佐町^{いひささちょう}の山の中にあり、戦国時代に井伊家の隠し田として開墾が進んだといわれています。まさに、当地の物語を当地で撮影するというこゝろで、村の衆は大喜びでした。

撮影当日は、スタッフ、マスコミ、総勢200人以上で賑わいましたが、実は、この棚田も近年、過疎化や高齢化の波を受け、耕作面積は3分の1弱(2.5ha)まで減ってしまいました。ですからふだんは棚田に行っても、会えるのは多くて数人です。

このような中山間地域の状況は、全国的なことだと思えます。山奥の小さな田んぼなんか効率が悪くて作っちゃ合わん。大規模集約化できない中山間地域は、農業では食べていけない。だから、地方創生という掛け声に反して、人口減少や農地の荒廃に歯止めがかからない。それが現実ではないでしょうか。

かなり素人考えですが、20年ほど前、私は思いました。棚田のような小さな農地は、産業(農業)として活用が難しいなら「自分の食べるものは自分で作りたい」という人(個人)が活用することはできないかと。そこで、まず、自分がやってみることにしました。勤めながら素人でもお米や野菜を作れるか。家族と田舎に移住して生活することは可能か。

田んぼを耕し始めて17年。田舎に引っ越し

て13年。10a(10枚)の棚田と、5aの畑(家庭菜園)程度なら十分やれることが分かりました。また、棚田でお米づくりを始めて10年が過ぎたころ「素人でもお米が作れますか？」と尋ねてくる人が現れ始めました。

中には田植えと稲刈りだけ体験したいという人もいますが、久留女木は高齢化が進んでいるのでオーナー制度などはできません。ですから、全部自分でやるなら田んぼを貸しますよということになります。でも、田んぼの作り方も稲の育て方も、全く知らない素人さんにはハードルが高すぎます。

そこで、勉強の場として「久留女木棚田塾」を発足しました。1年の農作業を1年かけて勉強し、できると思ったら来年から正式に借りる。そして、地元農家との意思疎通の場として「久留女木竜宮小僧の会」というグループに入会する。そのような仕組みにしました。現在、4名の外部耕作者と、5名の棚田塾生が、浜松市街から通ってお米づくりをしています。すると、村を出た若者の中から「自分にも何か協力できないか？」と申し出る人が現れました。

一口に田舎、棚田といっても、まだ担い手がいて、オーナー制度や観光農業で盛り上げられる地域もある反面、高齢化や過疎化が進んでしまったり、地理的条件が悪かったりして、難しい地域もあります。久留女木もそうですが、むしろ問題は後者の方です。美しい日本の原風景を失わないために、何ができるか。それぞれの地域に合った活動が必要です。

(すずき かずのり)